E-4　（個人発表　6月12日(土)15:30～15:55　N313教室）

文化資源の変容

西南中国の少数民族・トン族の芸能の事例から

兼重努（滋賀医科大学）

近年、資源人類学という新たな研究領域がたちあげられ、文化を資源としてとらえる視点が提起されている。そうした流れのなかで、武内房司は中華人民共和国における文化資源の研究課題について以下のように指摘している。

中国は少数民族や漢族など多くの民族集団が存在する多民族国家である。それら民族集団はそれぞれ文化資源を有する。有形・無形の文化は往々、民族を特徴付ける資源として生み出され、応用され、さらにメディアを通じて発信される。しかし、文化資源に関しては多くの問題点が未解明のまま残されてきた。なかでも文化資源が、だれによって、どのように生み出され、どのように変貌を遂げ戦略的に活用されていくのかという点が問題なのである［武内　n.d.（2006?）］。

本発表では、西南中国の少数民族トン族が母語で演じる劇（トン劇という）の演目のひとつ「珠郎娘美」（「秦娘梅」）をとりあげる。なぜならば、それは元来各村にあったトン劇団が演じる村芝居の演目、すなわち局所的文化資源であったが、中国共産党の文芸政策の推進に伴い、トン族という民族を代表する民族文化資源に変換され、さらにそれは貴州省という地域を代表する地域文化資源へと変容していったという経緯をもつ。そのため、文化資源の変容のありさまを考察するための格好の事例となりうる。本発表では以下に示す2つの作業を通じて、武内が提示した上記の問題を考えるうえで重要な事例を提示する。

（1）局所的文化資源→民族文化資源→地域文化資源という変容の過程を、各段階で生じた、劇のテキストの書き換えについての具体的な分析もからめながら、通時的にあとづけてゆく。トン族は貴州省、湖南省、広西チワン族自治区という3つの省（自治区）級の行政区画にまたがって連続的に分布している。各省（自治区）において、「珠郎娘美」に対する資源としての位置づけが異なっている。そうした地域差にも十分目配りをしつつ分析する。

その際（2）変貌の各段階で関与する主体を特定してきめ細かく分析をすすめてゆくことが必要不可欠である。そのため以下の6つの指標を設定する。①資源の認定（誰が何に対してどのような利用価値があると認定するのか）、②資源の探査（誰がどこでどのようにして資源を探すのか）、③資源の加工（資源として活用するために、誰がどのように手を加えるのか）、④資源の活用（誰が何の目的でどのように活用するのか）、⑤資源の評価（活用された資源を誰がどのように評価するのか）、⑥資源の影響（資源に対する評価が、誰にどのような影響（フィードバックも含めて）を与えるのか）である。

中国においては、1979年の改革開放政策実施にともない、国家政策は従来の階級闘争路線から市場主義経済化路線へと大転換し、少数民族の文化は経済利益をあげるために活用しうる資源とみなされるようになった。先行研究では改革開放以降のこうした民族文化の商品化に議論が集中する傾向にあった。それに対し、本発表では、民族文化の商品化の志向性がまだ現れていなかった（否定されていた）、1950年代から60年代初頭にかけての時期を対象とする。なぜならば、当時中国では「文化資源」という言葉こそ使われてはいなかったが、各民族の文化のうち、とくに音楽、舞踏、演劇関連のものを、社会主義イデオロギーを宣伝、発揚するために積極的に活用しようとする動きがあったことを見過ごしてはならないからである。中国共産党政権は1950年代から漢民族、少数民族を問わず、各民族の音楽、舞踏、演劇を対象に、地方レベル、国家レベルで上演会を開催した。その過程で従来、対外的に演じられることがなかった村レベルの劇が各省の省都や首都で演じられ、かつ官製メディアでも報道され中国社会の多くの人びとの耳目に触れることになったのである。

トン劇「珠郎娘美」は、市場主義経済化以前の中国において、社会主義イデオロギーを宣伝、発揚しようとする為政者に利用されただけではなく、トン族という民族をアピールするための民族文化資源として、また、貴州省の文化的劣位を否定するための地域文化資源として、さまざまな主体によって活用された。本事例は中国以外の、社会主義体制をとる多民族国家における文化資源の変容との比較研究に資するだけではない。世界各地で生じていると予想される、局所的文化資源が民族文化資源や地域文化資源へと拡大してゆく現象を比較検討するうえでの一助にもなるであろう。

【参考文献】

武内房司　n.d.（2006?）http://www.minpaku.ac.jp/research/jr/06jr086.html

【 文化資源、局所的文化資源、民族文化資源、地域文化資源、西南中国 】